

「歩く」という言葉があります。これは「歩かない、歩きます、歩く、歩け、歩こう」という具合に、「かきくけこ」と語尾が変化します。これを外国人に教えても、正しく使えません。ほとんどの外国人は基本型の「歩く」しか使えないものです。

「歩かないよ」、「歩きます」、命令形でも「あなた、歩く」という言い方になってしまいます。「かきくけこ」と変化することが理解できていても、実際にはそれをうまく使いこなせない場合が多いのです。

ところが、三歳の子どもは、そんなふうに教えなくても「かきくけこ」がちゃんと使い分けできます。これは幼児の頭がひとりでにそういう働きをするからです。

この理由を論理的に説明づけることはむずかしいのですが、外国人のように考えて使い分けでもないのに、未然形を使うべきところは未然形を、連用形を使うところは連用形を使います。つまり頭は単に言葉を記憶しているだけではないのです。

それをちゃんと消化し、そこから法則をつくり出しています。そしてその法則を使い言葉を話していると考えなければ、説明かつかないわけです。無意識のうちに、論理的な思考をしているわけです。

この語尾変化を通してひらがなを覚えます。

「歩く」では、かきくけこ

「捜す」では、さしすせそ

「立つ」では、たちつてと

「死ぬ」では、なにぬねの

「読む」では、まみむめも

「走る」では、らりるれろ

濁点文字も同様で、「泳ぐ」では「がぎぐげご」、「学ぶ」では「ばびぶべぼ」が自然とわかるようになります。

これだけでもかなりの「かな」を覚えます。ひらがなには意味がなくても、漢字につながる必要な字だとわかってくるのです

ポイント:子どもを試してはいけません。読めようと読めなかりうと、それを繰り返してあげていけばいいのです。親子で同じことを言っていれば、覚えなくたって言えるわけですから。同じことを繰り返せば、脳は育っていくのです。